

複数の委員会・分科会からの提言等の査読について  
(幹事会懇談会での議論を踏まえて)

2020年2月28日

科学と社会委員会委員長 渡辺美代子  
課題別審議等査読分科会委員長 藤原聖子

問題提起：現在、同一の部を超えた複数の委員会と分科会が合同で提出する提言等の査読体制に関する規定がないため、その規定が必要である。

査読体制の提案：同一の部を超えた場合等の複数の委員会・分科会が合同で提出する提言等の査読体制は、以下の方法のいずれかとする。どちらの方法をとるかは、複数の提言等提出委員会・分科会のうち、主たる委員会・分科会の査読を担当する組織（科学と社会委員会の課題別審議等査読分科会、所属する委員会、所属する部\*のいずれか）が決定する。

1：提言等提出委員会・分科会それぞれの査読を担当する組織（科学と社会委員会の課題別審議等査読分科会、所属する委員会、所属する部\*のいずれか）の合同査読チームにて査読を行う。

合同査読チームの査読者は、該当する分科会・委員会・所属部\*それぞれから1名（以上）とする。責任者は、主たる提言等提出委員会・分科会の査読を担当する委員会・所属部の中から選ばれる。

2：複数の提言等提出委員会・分科会のうち、主たる委員会・分科会の査読を担当する組織（科学と社会委員会の課題別審議等査読分科会、所属する委員会、所属する部\*のいずれか）が査読を担当するが、査読責任者は、提言等の内容により、他の\*\*会員・連携会員に、追加査読委員として協力を求めることができる。

\* 科学と社会委員会が提出した提言等の場合は、幹事会を含む。

\*\*その提言等を提出した委員会・分科会の内、主たる委員会・分科会以外の委員会・分科会の査読を担当する組織（科学と社会委員会の査読分科会、所属する委員会、所属する部）に属する委員

## 提言等に関する事前の確認体制の現状について

組織	提出	査読	承認
部	①科学と社会委員会(内規第3条第2項)	①科学と社会委員会課題別審議等査読分科会(ガイドライン)	②幹事会(内規第3条第1項)
委員会	幹事会附置委員会	①科学と社会委員会(内規第3条第2項)	②幹事会(内規第3条第1項) ※ただし、幹事会メンバー全員が委員であれば幹事会の承認を得なくてもよい。
	分科会	①所属する幹事会附置委員会(検討中)	①所属する幹事会附置委員会(内規第3条第4項) ②幹事会(内規第3条第1項)
	機能別委員会		
	科学と社会委員会以外	①科学と社会委員会(P)	②幹事会(内規第3条第1項)
	科学と社会委員会	①幹事会(検討中)	②幹事会(内規第3条第1項)
	分科会	①所属する機能別委員会(検討中)	①所属する機能別委員会(内規第3条第4項)(審議の手順について1) ②幹事会(内規第3条第1項)
	分野別委員会	①所属部(内規第3条第3項)	②幹事会(内規第3条第1項)
	分科会	②所属部(検討中)	①所属する分野別委員会(内規第3条第4項) ③幹事会(内規第3条第1項)
	課題別委員会	①科学と社会委員会(内規第3条第2項)	②幹事会(内規第3条第1項) ※ただし、幹事会メンバー全員が委員であれば幹事会の承認を得なくてもよい。
	分科会	②科学と社会委員会(検討中)	①所属する課題別委員会(内規第3条第4項) ③幹事会(内規第3条第1項)
若手アカデミー	①科学と社会委員会(検討中)	①科学と社会委員会課題別審議等査読分科会(検討中)	①幹事会(内規第3条第1項) ※若手アカデミー運営要綱第8条第2項による準用)
分科会(運営分科会を除く)	①科学と社会委員会(検討中)	①科学と社会委員会課題別審議等査読分科会(若手アカデミー運営要綱)	②幹事会(若手アカデミー運営要綱)(内規第3条第1項) ※若手アカデミー運営要綱第8条第2項による準用)
運営分科会	①科学と社会委員会(検討中)	①科学と社会委員会課題別審議等査読分科会(検討中)	①若手アカデミー(内規第3条第4項) ※若手アカデミー運営要綱第8条第2項による準用) ②幹事会(内規第3条第1項) ※若手アカデミー運営要綱第8条第2項による準用)

## 科学と社会委員会（第24期・第11回）議事要旨

1 日 時 令和元年10月17日（木） 12:15～13:30

2 場 所 日本学術会議5階 5-C（1）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、高橋 桂子（第三部会員・幹事）、  
遠藤 薫（第一部会員）、藤原 聖子（第一部会員）、西村 いくこ（第二部会員）、  
松浦 純（第一部会員）、平井 みどり（第二部会員）、古谷 研（第二部会員）、  
坪井 俊（第三部会員）、  
（欠席） 小林 傳司（第一部会員・副委員長）、甲斐 知恵子（第二部会員）、  
小安 重夫（第二部会員・幹事）、中村 崇（第三部会員）、  
藤井 良一（第三部会員）、沖 大幹（連携会員）、蟹江 憲史（連携会員）  
（事務局）鳥生審議専門職

### 4 議事要旨

#### （1）SDGsに関わる提言のHP掲載について

- ・HP掲載の際に必要な日本語要約や英文キャッチフレーズ等を提言等の作成者に提出してもらえば、チェックシートに項目の追加が必要である。今期の内に次期でも持続できるような形にしておきたい。
- ・チェックシート作成の負担が重くなるのは良くない。チェックシート項目を少し整理しても良いのでは。
- ・SDGsのHP掲載に必要な要約等は期限を設けずに、公表が決まった後で作成することになれば負担が分散するのではないか。
- ・SDGsは、そもそもどこをターゲットにアピールするものなのか。
- ・SDGsへの取り組みは企業が目立つが、政府・省庁も注目しており、学術会議の関連提言もリファレンスに入れていくくらい参照しているという話も聞いている。
- ・そのような場合は、リファレンスに入れてもらうようHP等に記載しても良いかもしれない。
- ・SDGsに関するチェックシート配布時に、もう少しインセンティブになるようなことを記載した方が良いかもしれない。少なくとも掲載URLを記載した方が良い。また、HPが見られていることがわかるデータも記載するのが良い。

●以上の議論を踏まえ、チェックシートを査読用の項目とSDGsに係る任意の項目の2つのシートに分ける形で改訂することとなった。

#### （2）提言等で異なる意見が出た場合の対応

- 高橋幹事より、資料2に基づき説明があり、意見交換があった。概要は以下の通り。
  - ・チェックシートについては、既存の提言等と異なる意見があった場合、具体的にどう異なるか記載するのが良い。
  - ・インパクトレポートについては、提言等の発出後に委員会内での意見の変化があった場合、それを受けたものであることがわかるような記述にすべきでは。
  - ・分科会は期ごとに一旦廃止するのが原則であり、事実上、同じ分科会が提言を訂正することはほぼ無いのではないか。その場合、親委員会が対応するのだろうか等、対応が難しい。
  - ・それは各々の委員会・分科会で決めて頂くしかないのでは。

- ・インパクトレポートには、「提言発出後の変化があれば書くことが出来る」という形で良いのでは。状況の変化に対応が必要な時にこういうものも使えるということを示す形である。フォロー・リカバーする際の選択肢になれば良い。
- ・特筆すべきことがあればお書きください、という形が良いか。更には「発出後さらに言及すべき事項が増えたか、過去の提言との関係性に変化があったか等」の例示が考えられる。
- ・現行ガイドライン別図の「遵守」という表現は一方向的で強すぎるのではないか。また、「部」の表記が抜けている箇所がある。

- 以上の議論を踏まえ、以下の通りとなり、規定関連の改訂については高橋幹事が事務局と相談することとなった。
  - ・提言チェックシートは、既存の提言等と異なる意見があった場合、具体的にどう異なるか記載するよう改訂する。
  - ・インパクトレポートは、提言発出後に意見の変化があった場合、それを書きたければ書けるような項目を追加する。
  - ・ガイドラインには、上記のような方針を追記する。また、ガイドライン別図の文言を適正化する（「遵守」という言葉が強すぎる、「部」の表記が抜けている等）
  - ・会長メッセージは、上記に沿うよう改訂することを、渡辺先生から会長に提案してみることにする。

### (3) 今後の活動について

- 渡辺委員長より、資料3に基づき説明があり、意見交換があった。概要は以下の通り。
  - ・今期、本委員会から報告等を作成するかどうか。
  - ・何らかの形で本委員会の議論を発表した方が良いだろう。今期の活動を来期に伝える必要もある。長いものを書く必要は無い。この時期、このようなことは重要だと考えたことは残した方が良い。
  - ・内容はもう少し簡単で良いのではないか。
  - ・提言等をSDGsで整理したことを軸とし、今後は更に提言等をSDGsに沿う形で出しやすくする、という方向性を提示するのはどうか。
  - ・分科会に適切な執筆者が居ればそちらに担当してもらっても良い。
  - ・資料3の4.の項目はこれまで議論しておらず、調査等も間に合わないので、削除する。
  - ・各項目を各執筆者に書いて頂き、集まったものを議論して修正をしていく形にしたい。
- 以上の議論を踏まえ、報告を作成することとし、渡辺委員長と藤原委員で相談の上、執筆担当の案をメールでお知らせすることとなった。

以 上

科学と社会委員会 科学と社会企画分科会（第24期・第3回）議事要旨

1 日時 令和元2月3日（水） 10:00～12:00

2 場所 日本学術会議5階 5-C（1）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、高山 弘太郎（連携会員・副委員長）  
藤原 聖子（第一部会員・幹事）、川口 慎介（連携会員・幹事）、  
遠藤 薫（第一部会員）、高瀬 堅吉（連携会員）、沖 大幹（連携会員）  
（欠席） 西嶋 一欽（連携会員）  
（事務局） 高橋参事官、酒井参事官補佐、鳥生審議専門職

4 議事要旨

（1）本分科会及び科学と社会委のこれまでの審議について

- 渡辺委員長より資料1-1及び資料1-2により説明があった。

（2）議題1～3について、自由に意見交換があった。主な内容は以下のとおり。

社会における学術について

- ・学術に対して社会が期待しなくなっているのを感じる。学術が大事だからサポートして欲しいと言っても通じない。夢を語り、学術がこんなことを明らかにするし、課題を克服するし、明るい未来を作れるということをきちんと示せば、サポートに同意してくれるのではないか。アピールしていくことが重要。
- ・その観点で学術会議は展望2020を出そうとしている。2030、2050年に学術の観点から考える未来を示そうとしている。
- ・クラウドファンディング等で個別の分野には支援が集まっている。何を目指しているのか一般的にわかるようにするのが重要。
- ・具体的なものには社会も興味を示す。展望2020にも具体的なものを入れることが重要。
- ・個別の政策を並べても全体では混沌としてしまい、一般の人はそれに苛立っている。故に、山師的なものではなく、未来を誠実に語りつつ、人の心に刺さるストーリーが大事である。どんな未来なら受け入れられるのかを考え、そこに学問がどのように貢献できるのかを考える必要がある。
- ・学術が社会に示すところの「社会」とは何かというとき、やはり産業なのかなと思う。産業界が注目していることを先ずやった方が良いのではないか。
- ・今の産業界に、芸術・感性といった観点が無いのがいけないのではないか。世界の産業ではデザインから入らなければモノが売れないというのが常識だが、日本ではそうではない。
- ・現在は一般市民の情報やデータに関するリテラシー欠如がありながら情報過多である。市民の情報リテラシーを上手くつくってあげる必要がある。情報がたくさんあるものが必ずしも正しいとは限らず、学術が正しく理解される意味でもこれは重要。
- ・若者や女性が社会の端っこに押しやられている現状がある。
- ・全世代が学術を使って、社会を活性化するためのチャンスが皆に与えられることが重要。そのための大学院等も作られてるが、それらの評価の尺度が大きい会社に入るとか、古いままではいけない。どれくらい起業しているかなど、新しい価値を提案するものではない。

- ・我々の社会認識が間違っただまま固定化しているのが問題。それを解くのが学術の仕事であるが、社会の認識を要素還元的に行うのは間違いなのではないか。複雑な事象を複雑なまま伝えることも有効である。問題の本質にはストーリーが必要であり、そのストーリー無くして学術への期待を社会に聞くのは誤りではないか。
- ・研究力に関して、大学では学生時代にやったことを継続してやっている。自分の専門分野だけに固執するのはどうかと思う。新しいチャレンジを大学の教員もやるべきではないか。こういう研究が必要だと思えば、その時その時で必要と思う研究をすべきではないか。
- ・研究力の一番の指標は研究者人数だと思う。構造として、人口の何パーセントが研究者になるべきか、その基盤としてどれくらいが高等教育に進学すべきか、適正規模を考えるべきではないか。
- ・江戸時代に遡れば、学校に行けない人たちも知識・技術を得て成功してきた歴史がある。そこに知識・技術に対するリスペクトがあったと思う。個別の分野ではなく、一般教養のような研究マインドの涵養が必要ではないか。

#### 学術会議の役割について

- ・シンポジウムも大事だが、理解してもらうためには、学術の側から説明しに行く必要があるのではないかと。成果が出るまで責任を取るべきではないかと思う。産業をきっかけにすればこれがやりやすい。
- ・ソサイエティ5.0のビジョンに社会的な面が表層的にしか出てこない。その中身を我々学術が肉付けして、それで国際的提案力をつけるのが良いのではないかと。世界的な流れでは、ソサイエティに人文社会を絡めるのがトレンドである。これは世界に発信するいい機会であり、人文社会の話を取り込んだ方がより良い産業が出来ますよ、ということを示せる。
- ・市民のリテラシーにはそんなに期待できないのではないかと。我々も専門外には無知である。自分で考えて全てを正しく判断するのは無理ではないか。社会が迷っていることに対して、学術会議が一定の意見を示し、信頼を得ることには意味があるのではないかと。
- ・社会から求められていることに対し、学術会議がお墨付きを与えるのが重要と考える。その考えから24期は様々なところと対話しており、具体的には審議依頼を積極的に受けている。このように学術会議が外部から求められる部分を作っていく、それに誠実に答えて信頼されるというプロセスは必要だろう。

### (3) 政府との関係及び学術会議の対応について

- 渡辺委員長より、資料3-1により、「日本学術会議のさらなる活性化に向けて」（内閣府平成27年3月20日）について説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。

#### 本分科会の今後の活動について

- ・「日本学術会議のさらなる活性化に向けて」に対する学術会議の対応について、25期に考えてもらうために、報告か提言にして残すことが望ましいと思う。
- ・政府が学術を大事にしてくれていると思えば社会もそう見てくれると思う。だがその際、独立性を維持した学術の存在が信頼性を高めるということが重要。
- ・そのような提言は展望2020がやるのではないかと。
- ・展望は具体的な提言にはならないと思う。政府に対する要望として本分科会でまとめるのはどうか。今期に変えることはできなくても、次期に残すことはできる。
- ・政府から宿題をもらって、それを返すことで価値を持つのが良い。
- ・本分科会としては、展望2020をメタ的に見ていくのはどうか。展望は展望で、足り

ない部分を本分科会でまとめる。こちらは政府との対話を前提とするのも一つのやり方である。

- ・連携会員については、予算に見合った規模でやることも必要である。
- ・現在の予算規模であれば、分野別委員会も課題に合わせて分科会を立ち上げないと回らないと思う。
- ・世の中で結局何が信じられているかとなると、やはりテレビだと思う。しかしテレビもミスリードすることもあるので、人の気持ちを考えながら事実を示せる学術会議にならないといけない。

#### 特に SDGs に関して

- ・SDGs に関しては、政府のためというより世界のため、そしてそれが日本のためになるというスタンスが望ましい。
- ・SDGs については米国が積極的でないのは気になるが、海外を見習うのではなく、日本だからこそできる提言を目指したい。
- ・SDGs に対する貢献だけでなく、それ以上のことができるということを強調できるようにできればいい。
- ・政府の「日本学術会議のさらなる活性化に向けて」を受けて返す形の提言としたい。その際、SDGs の観点も入れていくこととする。

- 渡辺委員長と藤原幹事で提言のたたき台を作成し、各委員にはメールでご議論頂くこととなった。

#### (4) 外国人アドバイザー

- 渡辺委員長より、資料4により説明があり、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。
  - ・外国人アドバイザーに展望2020を読んでもらうのが良いのではないか。
  - ・学長クラスの方もよいが、展望を英語にする際にフットワーク軽く動けるような方もよい。
  - ・日本語のわかる方がよい。

以 上

## 第 24 期 科学と社会委員会委員名簿

令和 2 年 1 月現在

	氏 名	所属・職名	備 考
委員長	渡辺 美代子	国立研究開発法人科学技術振興機構副理事	第三部会 員、副会長
副委員長	小林 傳司	大阪大学COデザインセンター教授	第一部会 員
幹事	小安 重夫	国立研究開発法人理化学研究所理事	第二部会 員
幹事	高橋 桂子	国立研究開発法人海洋研究開発機構地球情報 基盤センター センター長	第三部幹 事
	遠藤 薫	学習院大学法学部教授	第一部会 員
	藤原 聖子	東京大学大学院人文社会系研究科教授	第一部副 部長
	松浦 純	東京大学名誉教授	連携会 員
	甲斐 知恵子	東京大学生産技術研究所特任教授・名誉教授	第二部会 員
	西村 いくこ	甲南大学教授、日本学術振興会学術システム研 究センター副所長	第二部会 員
	平井 みどり	神戸大学名誉教授	第二部副 部長
	古谷 研	創価大学大学院工学研究科教授	第二部会 員
	坪井 俊	東京大学大学院数理科学研究科教授	第三部会 員
	中村 崇	東北大学名誉教授	第三部会 員
	藤井 良一	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 長	第三部会 員
	沖 大幹	東京大学未来ビジョン研究センター教授	連携会 員
	蟹江 憲史	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教 授	連携会 員

第24期 科学と社会委員会  
科学と社会企画分科会委員名簿

令和2年1月現在

	氏名	所属・職名	備考
委員長	渡辺美代子	国立研究開発法人科学技術振興機構副理事	第三部会員
副委員長	高山弘太郎	豊橋技術科学大学エレクトロニクス先端融合研究所教授、愛媛大学農学研究科教授	連携会員
幹事	藤原 聖子	東京大学大学院人文社会系研究科教授	第一部会員
幹事	川口 慎介	国立研究開発法人海洋開発研究機構研究員	連携会員
	遠藤 薫	学習院大学法学部教授	第一部会員
	沖 大幹	東京大学未来ビジョン研究センター教授	連携会員
	高瀬 堅吉	自治医科大学大学院医学研究科教授	連携会員
	西嶋 一欽	京都大学防災研究所准教授	連携会員